

|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | メタ否定の手続き的考察                                                                         |
| Author(s)    | 吉村, あき子                                                                             |
| Citation     | 待兼山論叢. 文学篇. 1993, 27, p. 33-48                                                      |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/47840">https://hdl.handle.net/11094/47840</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# メタ否定の手続き的考察

吉村あき子

## 1. 序

Blakemore (1987) は、意味論が、概念的意味 (conceptual meaning) を扱うものと手続き的意味 (procedural meaning) を扱うものに二分されるべきであることを提案した。この論文では、この二分法が、言語分析において重要な役割を果たし、これまで誰も首尾一貫した分析を与えることができなかったメタ否定と否定対極表現 (Negative Polarity Items (NPIs)) の関係を統一的に説明することを明らかにする。

## 2. 「概念的」意味論と「手続き的」意味論

### 2.1. Blakemore の手続き的分析 : But

Blakemore (1987) は、関連性理論 (Sperber and Wilson 1987) を用いて、so や after all のような、真理条件的意味に貢献しない表現が存在することは、言語を分析する意味論が統一的な一つの理論ではないことを示唆し、意味論には、真理条件的意味を扱う本質的に概念的理論と、命題の処理の仕方を扱う手続き的理論があると主張する。

and と but の違いを観察すると、その二分法が容易に見て取れる。例えば、He is poor but he is honest. と He is poor and he is honest. の真理条件は同じである。それは概念的意味内容が共通であるからだが、and と but にはよく知られた違いがあり、Blakemore はこの違いを but

が持つ手続き的意味から生じるとする。即ち、「聴者は、but が導入する命題を、それに先行する発話の命題から派生された想定と論理的に矛盾する命題を派生できるような文脈において、処理するように指示される」(Blakemore 1987 : 130、訳筆者) というのである。例えば、(1)を見てみよう。

(1) [A and B are discussing the economic situation and decide that they should consult a specialist in economics.]

A : John is not an economist.

(→ We shouldn't consult him.)

B : But he is a businessman.

(→ We should consult him.)

Bの発話の含意がAの発話の含意と矛盾するので、but が適切となるのである。

概念的意味だけでなく手続き的意味をも持っているという点において、ever や any のような NPI は but に類似している、と私は主張したい。特にこれらの語は、それを含む発話が否定の認知構造 (Cognitive Structure of Negation (CSN)) で処理されることを要求する。これは、命題がそれと矛盾する想定と並置される心的状態を示すもので、言い換えれば、否定の認知構造とは、but が現れるのと同質的に同じ認知的文脈をいうことになる。

## 2.2. 否定の認知構造

この節では、代表的な NPI の ever と代表的 NPI trigger の before を詳しく考察し、NPI の出現には、二つの条件があると主張する。一つは Ladusaw の DE 条件であり、他方は、CSN に対する要求である。

### 2.2.1. before 節の NPI に対する二つの条件

#### 2.2.1.1. Downward-Entailment (DE) 条件

(2)に示したように、*ever* のような NPI は、*before* のような語のスコープの中には現れるが外には現れない、という事実を適切にとらえるので、(3)に示した Ladusaw の DE 条件 (1979, 1980) を第一条件として採用する。

- (2) a. I sent a donation before I was *ever* asked to.  
 b. \*I *ever* sent a donation before I was asked to.

#### (3) Downward-Entailment (DE) 条件

- (a) 否定対極表現は downward-entailing 表現のスコープにおいて解釈される場合のみ容認可能である。

(Ladusaw 1980 : 13 訳筆者)

- (b) ある表現がそのスコープにおいて、超集合から下位集合への推論をライセンスするならばそしてその時に限り、その表現は downward-entailing である。 (*ibid.* : 7 訳筆者)

この条件にここで詳しく触れることはしないが、*not*, *before*, *if...* など は DE 表現であると思なされ、(4)–(6)の NPI の容認性を正しく予測する。[cf. Ladusaw (1979, 1980), Yoshimura (1992, 1993)]

- (4) Chrysler dealers don't *ever* sell *any* cars anymore.  
 (5) John will steal back into the audience before *anyone ever* notices his absence.  
 (6) If I *ever* see *any* of you around here again, I will call the police.

ところが、Ladusaw の DE 条件は単なる必要条件であるので、NPI が DE 表現のスコープの中に現れているのに容認されない(7)–(9)を説

明できない。そのため第2条件が必要になる。

- (7) \*He brushed his teeth before he *ever* went to bed.  
 (8) \*John was a respected businessman before he killed *any* homeless people.  
 (9) \*If he *ever* takes *any* medicine, he will feel better.

#### 2.2.1.2. 対比状況に対する必要性

*ever* をふくむ文は語用論的機能を持つ。

- (10) I lost my ticket before I (*ever*) got to the station.

(10)のような文は、*ever* があってもなくても同じ真理条件を持ち、このことは、*before* 節の *ever* が何らかの語用論的機能を果たしていることを示唆している。それは出来事の順序を強調することである、と私は主張したい。次の文を見てみよう。

- (12) Suspect : I met her and decided to accompany her here.  
 Detective : According to the station master, you had already purchased a ticket the day before ! So I submit that you were coming here before you *ever* met her.

(12)のような二つの出来事の時間的順序を強調するような例においては、*ever* の無い文よりある文のほうが適切であるというインフォーマントの指摘は、*ever* が *trigger* の *before* を強調する役割を果たしていることを示唆している。

そこで、*ever* が出来事の順序を強調するために用いられるとすれば、その出来事の起こる順序に疑いを持つ余地がなければならない。言い換えれば、可能な対比状況がなければならないのである。(13)―(15)を考えよう。

- (13) \*He brushed his teeth before he *ever* went to bed. (=7)

(14) \*He was quite a playboy before he *ever* got married.

(15) \*Jane took it down before she *ever* forgot it.

(13)–(15)は皆不適切である。何故なら、それぞれの対比状況、(13)では「床に付いてから歯を磨く」、(14)では「結婚してからプレイボーイになる」、(15)では「忘れてしまってから書き留める」が、一般的な経験からするとアクセス不可能だからである。

ところが、例えば(13)を次のような文脈の中に入れて、対比状況にアクセスできるため完全に容認される。

(16) The accused's alibi depends on the preposterous claim that he brushed his teeth while in bed; however, the eye-witness testimony of the butler proves that he brushed his teeth before he *ever* went to bed.

同じことが(14)についてもいえる。

(17) A: Isn't it funny that he became such a playboy only after getting married?!

B: You've got it all wrong: he was quite a playboy before he *ever* got married.

(15)については、「忘れてしまってから書き留める」ことは不可能なので、(15)を適切にする文脈は不可能である。以上のことは、*ever* の出現が対比状況の有用性に依存するという我々の主張を支持するものである。

### 2.2.2. 明示的否定文との平行性

*before* 節にある *ever* が要求する対比状況は、明示的否定文によって要求されるものと平行し、Givón (1978) によると、

(18) 「否定はそれに相当する肯定の内容が既に議論されたか、あるいは、それに相当する肯定の内容を聴者が信じている — したがって

よく知っている — と話者が思っているような文脈で用いられる。」

(Givón 1978 : 109)

Givón の用語を用いると、先行する肯定は「素地」(ground)を構成し、否定はその上に描かれる「図形」(figure)である。この心的構造を「否定の認知構造 (Cognitive Structure of Negation)」と呼ぶ。これは、正に NPI を含む発話を処理する際に必要とする認知構造そのものである。次に、関連性理論を用いてこの心的構造を定義し、この考え方に理論的根拠を与える。

### 2.2.3. 否定の認知構造の定義

否定の認知構造 (CSN) は、既存の想定を取り消すことによって関連性を達成するもので、but が CSN のマーカーとして働くことを示す。

Sperber and Wilson (1986) が述べているように、コミュニケーションにおける話者の意図は聴者の認知環境 — 即ち世界の表示 — を修正することである。新情報が既存の想定を含む文脈と相互作用し関連性を持つには三つの方法があり、第一は、(a)文脈と結合して文脈含意を生み出すことによって、第二は、(b)既存の想定を強めることによって、第三は、(c)既存の想定と矛盾しそれを取り消すことによって、認知環境を修正するというものである。第三の(c)が否定の認知構造が持つ心的プロセスである。

このことを念頭において、Givón の素地と図形を関連性理論で記述すると、図形は、所定時に我々の中央システムで処理されている論理形式に同定され、素地は認知環境に対応する。

従って、CSN (Givón の素地と図形) は、中央システムで新しい想定と結合されると矛盾を生じるような論理形式を認知環境が含んでいるような認知構造だと言える。

(19) 否定の認知構造 (CSN)

$\langle \Phi, \{ \dots \Psi \dots \} \rangle$

where the logical forms  $\Phi$  and  $\Psi$  lead to a contradiction.

(19)に示したスキーマが、我々が否定の認知構造 (CSN) と呼ぶものである。先の対比状況は、 $\Psi$  とそれによって含意されるものに対応する。

Givón の例では、上のスキーマの  $\Phi$  が否定文の論理形式に当たるが、必ずしも  $\sim\Psi$  とはかぎらず、この CSN は明示的否定文の分析を越えて有益である。(1)をもう一度考えてみよう。

(20) A : John is not an economist. (前提)

(→ We shouldn't consult John.) (文脈含意)

B : But he is a businessman. (前提)

(→ We should consult John.) (文脈含意) (=1)

Aの発話の後、その文脈含意 We shouldn't consult John. が話者と聴者の認知環境に入る。ここで、Bの発話の後のAの認知構造を考えると(21)のようになる。

(21)  $\langle$ John is a businessman,

$\{ \dots$ We shouldn't consult John... $\} \rangle$



$\langle$ We should consult John,

$\{ \dots$ We shouldn't consult John... $\} \rangle$

Bの発話によって引き出された文脈含意が与えられると、中央システムの内容は認知環境にあるエントリーと矛盾を構成する。即ち We should consult John と we should not consult John. である。このように、Blakemore の一般化を我々の言葉で言うと、but は、それが導入する命題が CSN で処理される時に限り、容認可能である。従って、but の存在を CSN の標識と見なすことができる。

CSN を用いて我々の第二条件を記述しなおすと、(22) のようになる。

(22) 否定の認知構造 (CSN) 条件

否定対極表現は、それを含む発話の命題が否定の認知構造において処理される場合にのみ容認可能である。

以上のように、*but* と *NPI* が容認されるのは当該の命題が CSN で処理される場合であると仮定されている。従って、命題が CSN で処理されないのであれば、*but* も *NPI* も容認されないはずであり、実際(23)–(25)はその予測が正しいことを示している。

(23) a. John claimed to have finished his washing up before retiring for the night. (#But) He brushed his teeth before he (#*ever*) went to bed.

b. John claimed to have finished his washing up in bed. But he brushed his teeth before he *ever* went to bed.

(24) a. We hope for his recovery. (#But) If he (#*ever*) takes (#*any*) medicine, he will get better.

b. He is seriously ill and will die sooner or later. We eagerly await his death, because his fortune will then be ours. But if he *ever* takes *any* medicine, he will get better. We should prevent that at all costs.

(25) a. I hear you often come around here. (#But) If you (#*ever*) come this way, be sure to visit me.

b. Now that you have to move to a town far away, it may be hard for you to make it over this way. But if you *ever* come this way, be sure to visit me.

### 3. メタ否定

この節では、手続き的意味論の視点から、メタ否定の発話の概念的意味の貢献は空であること、メタ否定の意味は認知処理者に手続き的指示を与えることだということを提案する。そして、メタ否定のスコープの中ではNPIが容認されない事実が、我々のアプローチでは自動的に説明されることを示し、メタ否定の手続き的分析の妥当性を主張する。

#### 3.1. メタ否定の基本的現象

Horn (1985) は、語用論的曖昧性の例として、記述否定とメタ否定の二分法を提案し、記述否定は命題の真理値を否定し、メタ否定は先行発話の断定可能性を否認すると主張している。ここでは、メタ否定を構成する基本的現象と、NPIがこの環境には現れないことを見る。

##### 3.1.1. 発音訂正

メタ否定の典型の1つは、(26)のような、音声表示や屈折形態に関するものである。

(26) A : You [mɪ'vɛniʃd] to solve some of the problems yesterday, didn't you?

B : I DIDN'T [mɪ'vɛniʃ] to solve some of the problems  
— I [mæniʃd] to solve some of the problems.

(Horn 1985 : 132)

NPIはこのタイプの否定とは両立しない。

(27) A : You [mɪ'vɛniʃd] to solve some of the problems yesterday, didn't you?

B : I DIDN'T [mɪ'vɛniʃ] to solve {some/#any} of the

problems — I [máeni:d] to solve some of the problems.

### 3.1.2. レジスターやスタイル訂正

メタ否定のもう一つの典型的な場合は、レジスターやスタイルに関するものである。

(28) A : The agency whacks pinko troublemakers.  
 (=CIA) (=kills) (=leftist)

B : The agency doesn't 'whack pinko troublemakers,'  
 — it neutralizes anti-American influences.

(29) Johnny : Grandma is feeling lousy.

Mother : Grandma isn't 'feeling lousy,' Johnny, she's indis-  
 posed. (Horn 1985 : 133)

このタイプにも NPI は現れない。

(30) #The agency doesn't 'whack (#any) pinko troublemakers,'  
 — it neutralizes unpatriotic influences.

### 3.1.3. フォーカスや含意の訂正

ここで扱う最後のケースは、フォーカスや含意 (connotation) の修正である。

(31) A : You resemble him. You are his daughter, aren't you?

B : I'm not his daughter — he's my father.

(Wilson 1975 : 152)

このタイプも(32)のように NPI と共起しない。

(32) #I'm not his daughter *at all* — he's my father.

Horn (1985) は、「メタ否定の例は全て、話者が、あることを与えられたやり方で断定したくないこと、或いは、他人の断定をそのままのやり方で

受け入れたくないことを知らせる否定の拡大用法を含んでいる」(Horn 1985: 135) と述べている。メタ否定は先行発話の断定可能性を否認するのである。

### 3.2. Linebarger のメタ否定の分析

Linebarger (1980) は、意味演算子 TRUE に適用される普通の真理条件的否定演算子として、メタ否定を扱っている。(33)を見てみよう。

- (33) a. \*She DID NOT *lift a finger* to help.  
 b. \*We DID NOT get up *until* 12:00.

「否認」の解釈がなされる時、NPI が容認されないことを説明するために、(33 a-b) の否認読みを(33')のように表して、外部否定を形式化している。

- (33') a. NOT TRUE (she *lifted a finger* to help).  
 b. NOT TRUE (we got up *until* 12:00)

これらが容認されないのは、NPI の *lift a finger* と *until* が NOT の直接作用域になく、NPI の容認可能性の必要条件を満たしていないためであると Linebarger は説明している。

この Linebarger の立場にとって最も深刻な問題は、(26)(28)(31)の Linebarger 流分析が妥当には思えないことである。

- (26') NOT TRUE (I managed to solve some of the problems)...  
 (28') NOT TRUE (the agency 'whacks pinko troublemakers')...  
 (31') NOT TRUE (I am his daughter)...

(26)において、話者がいくらかの問題を解決したこと、(28)では、CIA が最左翼を殺し、(31)では、話者が his の指す人の娘であること、は真である。もしメタ否定が真理条件に影響を及ぼさないのであれば、その論理形式に演算子 TRUE を用いることは正当化できない。

### 3.3. メタ否定の手続き的意味論分析

先の考察は、メタ否定が真理条件的意味に影響を及ぼさないことを明らかにした。このことはメタ否定が概念的意味ではなく手続き的意味を持っていることを示唆している。そこで、メタ否定は、否定される前の発話には何か問題があることを認知処理者に警告し、聴者に認知環境を適切に修正する手段を探すように指示するものであることを提案したい。従ってメタ否定は(35)のように定式化される。

(34) メタ否定

$\langle \phi, \{ \dots \Phi \dots \} \rangle$

The pre-negation utterance is problematic, so search for a means of appropriately modifying the cognitive environment.

$\Phi$ は先行発話から認知環境に保管された論理形式である。メタ否定は概念的意味レベルでは何も伝達しないので、 $\phi$ は概念的意味が空であることを表す。むしろその意味内容は、手続き的意味のレベルにおいてのみ見つけられるものである。

(34)の手続き的指示の形式は、メタ否定によって可能となる多様な解釈に適合するために意図的に漠然としたものでなければならない。実際、否定される前の発話には問題があるとするその問題点は様々で、(31)ではその発話が最善に関連性があるものではない点、(29)では社会言語学的不適切性を指摘している。

(34)の手続き的指示は、聴者が認知環境を修正するのにどのようなステップを取るべきかについても漠然としている。しかし、これも、多くの場合、適切な修正を探すことが限りのあるものではなく、決定的なものでも

ないという事実を反映している。例えば(31)は、その発話が最善に関連性があるものではないという解釈も、問題の人が父と呼ぶに値しないという解釈も可能である。このように、後続するコメントが与えられるまで解釈が決まらないということが、メタ否定のほとんどの場合に言える。

実際に認知環境を修正するにはどうするかということについて、その手続きにはいくつかの形式があるかも知れない。例えば次のようなものが考えられる。

1) もっと関連性のある他のものを探す。

e. g., (31) He is my father.

2) 先行発話に何故問題があるのかを探す。

e. g., (34) CIA 局員は口に気をつけないといけない。

具体的にいうと(34)の処理手続きは次のようなものである。

(35) a. A's utterance :

<The agency whacks pinko troublemakers, {.....}>

↓

b. B's utterance : the first part :

<φ, {...The agency whacks pinko troublemakers...}>

The pre-negation utterance is problematic, so  
search for a means of appropriately modifying  
the cognitive environment.

[聴者は認知環境の適当な修正を探し始める]

↓

c. B's utterance : the latter part :

<it neutralizes anti-American influences,

{...The agency...troublemakers...}>

↓

d. <CIA agents must watch their mouths, {.....}>

Aの発話の‘whacks pinko troublemakers’の部分は、社会言語学的要因の為に好ましくないイメージを伝達してしまう。そこでメタ否定を伴うBの発話の前半が、 $\phi$ で表される空の概念内容と(35b)の指示を伴って聴者の中央システムに入る。それからBの発話の後半が中央システムに入り、問題の部分を強調する。‘whacks pinko troublemakers’と‘neutralizes anti-American influences’との比較が最終的にCIA局員は口に気をつけないといけない、という理解に通じる。

(31)も同じように処理されると考えられる。

(36) a. <B is his daughter, {.....}>

↓

b. < $\phi$ , {...B is his daughter...}>

The pre-negation utterance is problematic, so search for a means of appropriately modifying the cognitive environment.

↓

c. <He is B's father, {...B is his daughter...}>

↓

d. <He depends on B in a sense,  
{...B depends on B's father...}>

(31)は、聴者がメタ否定によって与えられた指示についてどうすればいいのかわからない例である。問題はもう一つの説明的な発話を与えられて初めて解決される。(36b)の段階では、Aが探さなければならない問題は限りが無いが、アブダクションに基づいて処理を続ける。Bの発話の後半が与えられるとすぐに、聴者は、Bが問題だと見なしているポイントを理解し、認知環境にある既存の想定を取消して、新しいものに置き換え、関連

性を達成するのである。

この節を終えるに当たって、メタ否定の分析について二つの本質的な点を強調しておきたい。第一は、メタ否定は真理条件に影響を及ぼさないので、メタ否定の発話は概念的意味内容が空であること。第二は、メタ否定は、否定がつく前の発話には問題があり、認知処理者は何らかの行動を取らなければならないという警告からなる手続き的意味内容を持っていることである。次の節では、上の第一のポイントが NPI とメタ否定が共起しないことを自動的に説明することを示す。

### 3.4. CSN とメタ否定における NPI 問題の解決

メタ否定に関する以上の分析は、NPI の出現に対して我々が提案した条件と相互作用して、二つの現象が両立しないことを自動的に予測する。NPI は CSN においてのみ現れることができた。CSN においては、NPI を含む文の概念内容が認知環境の内容と矛盾を引き起こした。今もし、メタ否定が真理条件に影響を及ぼさないので、その発話の概念内容が空であるとするならば、それはとりもなおさず、CSN を構成する矛盾が単に起こらないということになる。従って、メタ否定は NPI が現れることを可能にする環境を与えることができないのである。これまでどのアプローチも解決できなかった、NPI とメタ否定の共起不可能問題が、何等の規定をつけ加えることなく予測されるので、これは現在のアプローチの妥当性を支持するものであると言える。

## 4. 結論

本論文では、概念的意味論と手続き的意味論の二分法を調べ、それが NPI の出現条件とメタ否定の説明を与えることを見た。この二つの現象が共起しないというこれまでどの分析にとっても問題であった事実が自動的

に予測されるという観察は、我々のアプローチが正しいことを示している。そして、この分析の成功は、意味論に手続き的レベルを設定した為に引き出せたものであり、概念的意味論と手続き的意味論の二分法が言語分析に重要な役割を果たすことを示すことができたのではないかと思う。

[参考文献]

- Blakemore, Diane (1987) *Semantic Constraints on Relevance*, Blackwell, Oxford.
- Givón, Talmy (1978) "Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology," *Syntax and Semantics* 9, ed. by Peter Cole, 69-112, Academic Press, New York.
- Horn, Laurence (1989) *A Natural History of Negation*, University of Chicago Press, Chicago.
- Klima, Edward S. (1964) "Negation in English," *The Structure of Language*, ed. by Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz, 246-323, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Ladusaw, William (1979) *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations*, Doctoral dissertation, University of Iowa. [Reproduced by the Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana, 1980]
- Linebarger, Marcia C. (1980) *The Grammar of Negative Polarity*, Doctoral dissertation, MIT. [Reproduced by the Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana, 1981]
- Linebarger, Marcia C. (1987) "Negative Polarity and Grammatical Representation," *Linguistics and Philosophy* 10, 325-387.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館書店 東京。
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- Yoshimura, Akiko (1992) "Cognitive Structure of Negation as an NPI-Licensing Condition" *English Linguistics* 9, 244-264.
- Yoshimura, Akiko (1993) "Pragmatic and Cognitive Aspects of Negative Polarity," *Osaka University Working Papers in English Linguistics* 1, 141-173.

(文学部助手)